

ば○中うへ○一のおまへのはしらによりかゝりてすこしほぶらせ給へるをかれ見奉り給へ、今はあけぬるに、かくおほとのごもるべき事かはと申させ給ふげになど宮のおまへにもわらひ申させ給ふも、おらせ給はぬほどに、おさめがわらはの庭鳥をとらへてもちて、あす里へいかんといひて、かくしをきたりけるがいか、しけん、犬の見付てをひければ、らうのさきににげいきて、おそろしうなきの、しるに、皆人おきなどしぬや、うへもうちおどろかせおはしまして、いかにありつるぞと尋させ給ふに、大納言殿の、聲めい王のねぶりをおどろかすといふ詩を、たかう打出し給へる、めでたうおかしきに、ひとりねぶたかりつる目もおほきになりぬ。

〔和漢朗詠集下〕禁中

雞人曉唱聲驚明王之眠鳬鐘夜鳴響徹暗天之聽都貞香

〔伊勢物語上〕むかし男みちのくに、すゞろにいたりにけり、そこなる女、京の人をばめづらやかにかおもひけん、せちにおもへるけしきなん見えける。○中さすがにあはれとやおもひけん、いきてねにけり、夜ふかく出にければ女。

夜もあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきてせなをやりつる

〔伊勢物語新釋三〕立入信友字伴州五郎と云人の江戸よりいひおこせけるは○中歌の意きつは、吾友平田篤胤がもの語に、己がうまれし國の出羽の秋田のあたりにては、木もてつくれる大なる箱を、家々にすゑおきて、水を蓄ふる器とせり、其器の名をきつといふ、老人のものがたりに、此きつ昔はおしなべて家ごとにありしものなりといへるが、ちかき比は、大かた瓶を用ふる事となりて、きつをすゑおく家は少く、其名を知るものも多からず、これ古き東語にて、きつにはめなんの歌は、雞をきつと云器の水中へ、うちはめんといへる成べしといへりとはいとめづらしき證ある考なるにつきて、なほ考るに、今も雞の宵鳴するをにくみて、玄かさせじ